
神戸市アカミミガメ防除活動に参加して思うこと

石原 清

651-1106 神戸市北区しあわせの村1-1 しあわせの村いきもの会議 水辺チーム

Extermination of red-eared slider turtle in Kobe city

By Kiyoshi ISHIHARA

Village of Happiness KOBE Natural life group, 1-1 Village of Happiness KOBE, Kita-ku, Kobe, 651-1106, Japan

私たちが神戸市の提唱するアカミミガメ防除活動に参加するに至った経緯は、私たちが神戸市シルバーカレッジ(以下「KSC」と言う)の生活環境コースに在籍していたことによる。KSCは3年課程で修了するが、3年生の卒業時においてはグループ学習が主体のカリキュラムになっており、テーマについては各グループが自主的に決める。そしてその集大成として、私たちは「魅力あふれる伊川を求めて ～呼び戻そう“人と自然”～」をテーマに論文をまとめた。メンバーの共通項は自然の動植物が好きなことである。

その趣旨は現代の子供たちに川遊びの面白さを知ってもらい、室内でゲーム遊びばかりしては体力もつかないし、それどころか長時間ゲーム遊びをすると視力にも悪影響を及ぼすのは必至である。それよりも川遊びをすることで、身近な川に興味と関心を持つようになり、自然の動植物のすばらしさを体感する人間になってほしい。それが私たちシニア世代の願望であった。その場所として身近な伊川を選んだのである。

私たちの活動を知ることになったしあわせの村いきもの会議(戸田耿介代表)が、同会議へのメンバーへの入会を誘っていただいた。そして私たちの活動はいきもの会議の水辺チームとして活動することになった。併せて、卒業後はKSCの卒業生からなるNPO法人「わ」の環境部会の一員としても、「川づくり研究会」と銘打って活動することになった。神戸市北区のしあわせの村にある池から流れ出て、須磨区の白川集落を流れる白川が中流部で西区伊川谷町の伊川となり、終には神戸市西区玉津町で明石川本流と合流する。その中心となる伊川流域を主なフィールド対象として川の水を市販の水質検査キットでCODの数値を、メンバーによる自製の流速計で流速を、また同じくアクリル製のパイプと市販の巻き尺を材料に、自製の透視度計で透明度を測り、水温計で水温を測定するなどの川の「環境調査」を伊川の上流地点、中流地点、下流地点を決めて定点観測を3年続けた。概ね同時期を選んで調査したことは言うまでもない。

それと並行して、同一地点で玉網を使用して魚類や水生昆虫の幼虫を捕獲したり、ザルでベントス(底生動物)を掬ってその生息密度を調査する「いきもの調査」も行った。3年間の推移を比較したが、概説すれば環境調査でもいきもの調査でも特に顕著な動きは見られなかった。

話が前後するが、KSCでは2年生の時にグループ学習のいわばリハーサル版?としてグループ学習と同様な自主授業があった。その時に、しあわせの村の日本庭園の池に当時からすでに外来種として、在来種のニホンイシガメ(以下「イシガメ」と言う)の生息環境を圧迫するアカミミガメの駆除をした。

そんな経緯もあって、いきもの調査の活動の一環としてアカミミガメを駆除すれば、減少を続けるイシガメにとってプラスになる。それと時をほぼ同じくして、生物多様性を環境行政の面から重視する神戸市環境局からアカミミガメの防除活動に参加していただけないかという打診を受けた。

私たちは積極的に参加することを決めた。これにはカメの捕獲数に応じて額は異なるが、一定の助成金が交付されるとのことだった。正直に申せばその助成金も防除活動において大いに私たちのモチベーションを高めてくれたのは事実である。

その後、助成金で自前のアカミミガメ捕獲用の網を3つ購入した。一つは脚付のモノ、残る2つは脚なしのモノであった。もちろん、神戸市に申請すれば無料で捕獲網を借りることが出来るのは承知していたが、防除活動の日が他のグループと重なったりすることも有り得る訳で、活動に制約をきたすことも考えられる。この点、自前の網を確保すれば、他のグループの動向を気にせず防除活動ができる。そして網は非常に丈夫でいったん購入すれば損傷は少なく、相当程度使用に耐えられると分かったので、この買物は正解だった。

ただし、防除活動にまだ十分な経験がない頃は、カメの性質に習熟しておらず、折角捕獲したアカミミガメに逃げられたりしたことがあった。カメはのろまというイメージが強いが、アカミミガメの逃げ足は想像する以上に速い。また、思わぬ副産物として、伊川が見た目は決してきれいとは言えない川であるが、ナマズやドンコ、カワヨシノボリ等、意外にも多くのいきものが生息する川であることが、いきもの調査を通じて判明した。

カメについて言及すれば(表1)、イシガメはほぼ毎年捕獲したが、生息数はやはり少ないと実感した。捕獲数の一番多いのはクサガメだった。クサガメは江戸時代に中国からの外来種だと近年分かったようだが、その繁殖スピード及びイシガメへの圧迫度がアカミミガメのそれに比べて緩やかなこともあり、駆除対象にはないので捕獲後は放流した。それが捕獲数の多い原因の一つかもしれない。捕獲数ではイシガメとクサガメの間にあるのがアカミミガメである。不思議なことに毎年獲れるのは1回当たりの産卵数がイシガメより多く、また産卵する回数も多いのが原因かもしれない。他にスッポンも時々捕獲した。スッポンは在来種か或いは中国、韓国からの外来種か専門家でも外見だけでは判断できないという。これも捕獲後は放流した。一度だけ、私たちの活動を見学していた近くの住民から、「是非、分けてくれ、1000円でどうや」と懇願された。放流するつもりだったが、結局、無償で渡した。件の彼は大喜びで、金を受け取らないなら、自家製のマムシ酒があるのでプレゼントすると言って持参したが、丁重にお断りした愉快的思い出がある。

魚類では近年絶滅危惧種として貴重なニホンウナギ、それも食べ頃サイズが伊川の中流付近で、これまでおよそ数匹がカメ捕獲網に入っていた。これも絶滅危惧種ということを考慮して放流したのが印象深い。他に気になった点は手足の一部が欠損したイシガメ(アライグマの仕業か?)やイシガメとクサガメの交雑種と思われるカメが獲れたことだ。

私たちは現在、絶滅の危機に瀕する在来種のイシガメが、かつてのようにたくさん生息できるような環境に戻したい、と願っている。そのためアカミミガメを駆除する努力は惜しまないつもりだ。体力が続く限りこの活動は続けたい。

表1. 伊川流域で捕獲した淡水ガメの個体数(内訳)

調査場所	調査日	捕獲個体数					備考
		アカミミガメ	クサガメ	スッポン	イシガメ	その他カメ	
伊川中流	2019/6/18-20	4	0	0	0	0	
"	2019/5/16-18	13	30	6	2	0	
2019年	計 N	17	30	6	2	0	
	種構成 %	31	55	11	4	0	
伊川中流	2018/7/20-22	5	15	0	0	0	ウナギ1
"	2018/7/11-13	6(+1)	4	0	0	0	+1は逃亡カメ1匹
"	2018/6/13-15	0	3	1	3	0	エサの食い逃げあり?
"	2018/5/14-16	5	4	0	1		イシガメ左前足欠損個体確認
2018年	計 N	16	26	1	4	0	
	種構成 %	34	55	2	9	0	
伊川中流	2017/7/26-27	3	0	0	0	0	
"	2017/7/7-10	4	0	0	0	0	
"	2017/6/18-22	5	1	1	0	0	
"	2017/5/22-24	1	6	0	0	0	
あいな里山公園	2017/6/7-8	3	0	0	0	0	
2017年	計 N	16	7	1	0	0	
	種構成 %	67	29	4	0	0	
伊川中流	2016/7/6-7	2	0	0	0	0	
"	2016/6/14-15	11	0	0	1	1	イシとクサの交雑種1?
"	2016/6/3-5	3	4	1	4	0	ウナギ2
2016年	計 N	16	4	1	5	1	
	種構成 %	59	15	4	19	4	
4年間	合計 N	65	67	9	11	1	
	種構成 %	42	44	6	7	1	

* 調査は、1回につき捕獲網を3個設置した。また、3日で1セットとし、初日は網設置、2日と3日目にそれぞれ網を回収した。捕獲個体数は、計2回の捕獲網回収により捕獲された個体数とした。



図1. 伊川流域で捕獲した淡水ガメと捕獲網設置の様子(左上:捕獲網の設置, 右上:捕獲されたクサガメ, 左下:捕獲されたイシガメ, 右下:捕獲されたアカミミガメ)